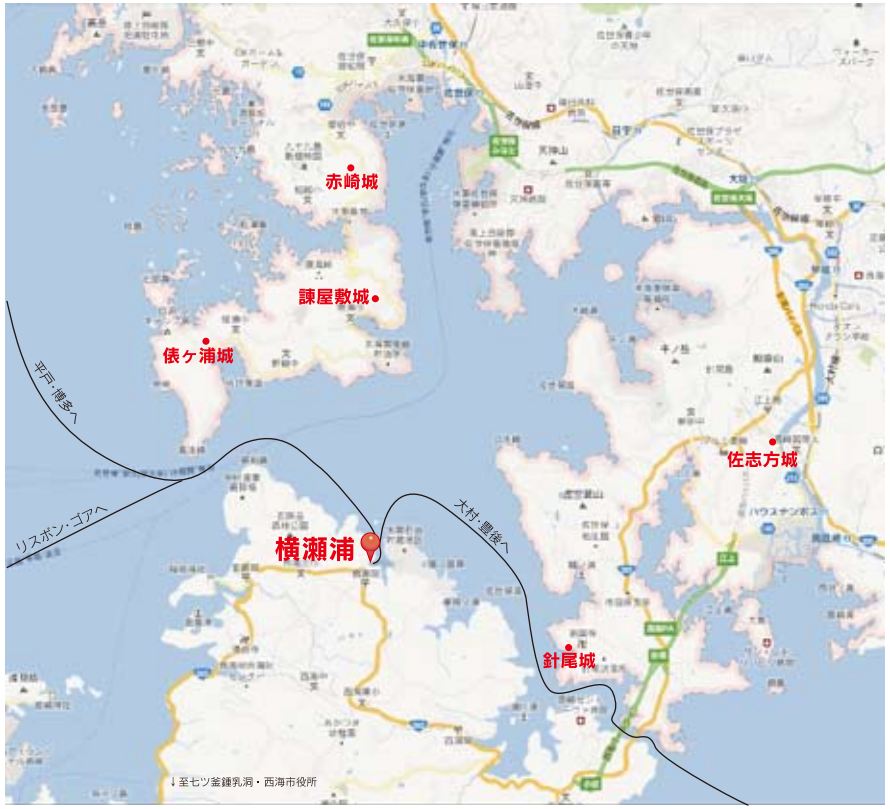
佐世保遺跡レポート

横瀬浦開港450周年を記念して

ルイス・フロイス像

1562年、宮の前事件により平戸を離れたイエズス会は、横瀬浦を布教の新天地とし、領主である大村純忠と開港協定を結んだ。横瀬浦は大いに繁栄。純忠はこの地で洗礼を受け、日本初のキリシタン大名となる。港をのぞむ小高い丘に教会が建てられ、教会周辺には繁華街が形成され、多くの商人たちが訪れ賑わったという。遊廓があった「丸山」、キリスト教徒の集落だった「上町・下町」、その途中の橋は「思案橋」と呼ばれるなど、いまの長崎の原型があり、その賑わいが伝わってくるようだ。

だがそのような繁栄を極める中、町は焼きつくされてしまう。開港からわずか１年後の1563年8月のことである。その後、ポルトガル船の入港地は、福田浦（長崎市の西海岸）、そして長崎へと移っていった。



横瀬浦周辺の地図と予想航路　Googleマップより

＜宣教師が来た当時の情勢＞

1562年の佐世保・針尾島付近は平戸松浦と宗家松浦と大村の領地争いの中にあり、そこに大村を敵視する武雄の後藤貴明が平戸松浦隆信の次男惟明を養子に迎え、佐世保方面への進出を図っていて、四つどもえの不安定な力関係のなかで戦が続いていた。さらに横瀬浦の領主である大村氏の家臣の一部にはキリスト教徒に反感を持つ者もいて、大村領内は不穏な政治情勢の中にあった。

＜主な関係人物＞

■ルイス・デ・アルメイダ（修道士）　1525－1583

1562年横瀬浦を調査し、豊後にいる神父トルイスに報告。横瀬浦に前準備として入り、トルイスを迎える準備を整える。献身的な布教活動とその人柄で人々に愛された修道士。

■コスメ・デ・トルイス（トーレス）（司祭・神父）1510－1570

1551年、日本を出国したザビエルに代わりイエズス会の日本布教長として教会発展の基を築いた。

1562年歓迎ムードのなか横瀬浦に上陸し、大村純忠を洗礼し日本人初のキリシタン大名を誕生させる。その後も各地で布教活動を行い1570年天草の志岐教会で亡くなった。

■ルイス・フロイス（司祭・神父）1532－1597

トルイス上陸の1年後、横瀬浦繁栄期に日本初上陸。その後、平戸から口之津へ渡り、1565年1月京都へ行く、念願のミヤコを見聞し多くの報告書をしたためる。信長や秀吉と謁見し、特に信長とは約20回も会い、手厚い待遇を受けている。しかし信長の死後、秀吉の下した禁教令により布教活動は厳しくなる。そんななか長崎で病没する。「日本史」の著者でもある。

「日本史」は布教活動を論ずる教会史であるが、一方において西日本の諸侯・武将の動静、日本人の庶民生活、民間信仰などに関する記述はきわめて貴重で第一級の史料となっている。特に信長・秀吉などの権力者のひととなりがいきいきと描かれた文面は大変興味深い。

■大村純忠（18代大村領主・三城城城主1533－1587）

有馬家からの養子として大村へ入り家督を継ぐ。1563年横瀬浦で洗礼を受け、ドン・バルトロメウと呼ばれた。1565年に福田を1570年に長崎を開港し南蛮貿易を推進した。1580年、長崎をイエズス会に寄進。1582年には天正遣欧少年使節を送り出した。1584年、龍造寺隆信に屈し家督を善前に譲る。

■後藤貴明（19代武雄領主・塚崎城主1534－1583）

横瀬浦事件の首謀者といわれている。元々は大村家の跡継ぎだったが後藤氏に養子に出されている。そのことによる恨みからか、生涯大村純忠と敵対する。横瀬浦事件の後にも平戸松浦と組んで純忠の三城城を攻めるが失敗に終わっている。

■針尾伊賀守（針尾領主・針尾城主？？？－1572）

横瀬浦の対岸に位置する針尾島の領主。横瀬浦で奉行を務めるが後藤貴明と手を組み、針尾瀬戸で宣教師を襲撃する、しかし宣教師は乗っておらず失敗に終わる。フロイスの「日本史」に針尾に城を構える殿「ハリボウ」として紹介されている。

＜横瀬浦年表＞

1549年（天文18年）

8月　フランシスコ・ザビエルとトルイス一行がヤジロウの案内のもと薩摩に日本初上陸する。

1550年（天文19年）

8月　ポルトガル船に乗ってザビエルとトルイス一行が初めて平戸に入港する。
平戸での布教をトルイスにまかせ、ザビエルは京へ上る。（その後日本を離れる）

1561年（永禄4年）

7月　平戸で**宮の前事件**が起こる。

8月　修道士アルメイダが横瀬浦を測量する。

1562年（永禄5年）

6月　ペロ・バレトを司令官とするポルトガル船、横瀬浦に入港。

7月　アルメイダが豊後より横瀬浦に到着、仮聖堂の建設に着手。トルイスを迎える準備。
神父**トルイス**が横瀬浦に到着。

8月　八ノ子島頂上に十字架を建てる。

9月　会堂が建つ。

横瀬浦港繁栄期

1563年（永禄6年）

3月　大村純忠が初めて横瀬を訪れ、トルイスに会う
会堂の向かいの山（町ノ辻）に十字架を建てる。
横瀬浦で日本最大の復活祭がおこなわれる。

5月　**大村純忠**が20数名の部下を連れて横瀬で洗礼をうけ、ドン・バルトロメウの名を受ける

6月　ペドロ・ゲーラを司令官とするポルトガル船、横瀬浦に入港。
ルイス・フロイス等、宣教師が横瀬浦に上陸する。

8月　大村純忠の使者ルイス（朝長新助）が横瀬から大村へ帰途、針尾瀬戸で**針尾伊賀守**に襲われ死亡する。
横瀬浦が混乱におちいり、豊後の商人たちがポルトガル船を襲う。町も教会も焼かれ、宣教師たちは船上に逃れる。

9月　アルメイダが豊後より横瀬の状況を視察に来る。

1565年（永禄8年）

7月　ジョアン・ベレイラのポルトガル船が横瀬浦に到着したが、後藤貴明らのクーデターのため福田浦に入港する。

1570年（元亀元年）

長崎浦がポルトガル貿易のため開港する。

宮の前事件

ポルトガル船員と平戸商人の売買交渉でおきたささいな喧嘩が、止めにきた平戸の武士とポルトガル船員との争いに発展し、ポルトガル船員14人（13人とも）が平戸の武士により刺殺された事件。

この事件で平戸武士に処罰を与えなかった領主の隆信に業を煮やした宣教師一行は平戸を出て行ったといわれている。

一部には仏教徒であった隆信が宣教師をおっぱらったような文面もあるが隆信にとっては、ポルトガル船の平戸撤退は大きな痛手だっただろうと思われる。隆信自身キリスト教への信仰はなかったのかも知れないが、家臣に洗礼を受けさせるなどの布教の許可もだしており、何より貿易による利益は捨てがたいものであったはずである。

領内に起こる仏教徒側のキリスト教徒への不満を抑えきれなかったというのが本当のところではなかっただろうか。

横瀬浦事件

大村家の跡継ぎを約束されていた貴明は武雄の後藤家へ養子に出され後藤貴明となる。代わりに有馬家から養子として純忠が大村に入り大村純忠となる。

その後藤貴明と、大村家臣の中にいたキリシタンに反発し貴明を支持するもの達とがキリシタンと純忠の両方を排除すべく計画をたてる。

1563年8月。横瀬を針尾伊賀守が、大村の城下町を後藤貴明がそれぞれ襲撃した。針尾伊賀守はこの横瀬浦の奉行を務めており、純忠の招きで横瀬浦から大村へ向かう外国人宣教師たちの船を針尾瀬戸で襲った。幸いにも宣教師たちは急病のため船に乗っておらず助かったのだが、大村純忠の使者である朝長新助が殺されてしまう。結果として、後藤貴明の城下町襲撃も失敗に終わり、宣教師も純忠も難を逃れた。

だが、横瀬の町は、この事件の混乱を利用して貿易代金の踏み倒しを狙った豊後（大分）の商人によって焼き払われてしまい。

教会が建ち、商人も集まって貿易港として発展しようとした矢先の事件で、わずか1年という短い期間で、横瀬はもとの寂しい港に戻ってしまった。

① 天主堂(教会)跡

高台にあった教会の跡地。「前庭から四段ほどで大きな門にいたるが、その内側に、奥行きと幅が8プラサあまりの方形の庭があり、それを真正面にして、奥行きが9プラサ、幅が5.5プラサの教会が建つ。」(「1562年10月25日付横瀬浦発信修道士アルメイダ書簡」より翻訳要約)＊1プラサは約2.2m

② 上町・下町跡

横瀬浦開港時代にキリスト教徒の集落があったといわれる地域。石の階段を境に上が上町、下が下町と分かれている。

③ 南蛮船来航の地記念碑

かつてポルトガル人は横瀬浦の港を、Porto de Nossa Senhorada Ajuda(「御助けの聖母の港」の意)と呼んだという。南蛮船来航の足跡をのこす碑が1962年、南蛮船来航400年を記念して立てられた。

④ 思案橋跡

遊郭へ行こか戻ろか思案したという上町・下町から丸山へと通じる道にかけられた橋の跡。一説には、「思案橋」「丸山」などの名称は、横瀬浦が発祥(それが長崎に伝わった)とも言われている。

⑤ 丸山跡 長袖さまの墓

横瀬浦が繁栄したころ、丸山と呼ばれる遊郭があったと言われるところ。
「長袖さま」と呼ばれる遊女の墓が残されている。

⑥ 大村館跡

大村純忠が横瀬浦の教会に通うために建てた館の跡地。熱心なキリスト教徒であった純忠は部下を連れて三城城から船で大村湾を横切り、ここから教会のミサに通ったといわれる。

⑦ 八ノ子島

横瀬浦の港口にある小島。頂上に立つ十字架を目印に、南蛮船が入港してきたという。現在の十字架は、1962年南蛮船来航400年を記念して再建された。海の駅船番所からきれいに見ることができる。

かつて栄えた貿易港の足跡を歩く、中世の港町散策。

南蛮船来航の地としての華やかな歴史は、今も町の随所に息づいている

横瀬公園の展望台から景色を眺め、当時に思いを馳せると楽しい。
今からちょうど450年前。遙か遠く西洋の地からやってきた宣教師を乗せた巨大な船が狭い佐世保湾の入口を通過しあの八の子島の脇を通りこの小さな港に入ってきたのだ、その威風堂々とした船の大きさ、初めて見る異国の風貌に庶民はどれほど驚いたであろう。
フロイスの記述で「横瀬浦は日本で最も知られたキリシタンの町になった」と報告されている。宣教師から「御助けの聖母の港」と呼ばれたこの地はまさにキリシタンにとって地上の楽園だっただろう。
日曜のミサの日ともなれば町中に背の高い黒服を着た宣教師や各地から集まった日本のキリスト教徒たちが溢れ、市場では日本中から集まった商人やポルトガル商人達の売買交渉の声が響きわたり、佐世保湾にはポルトガルや日本各地からやって来る大船小舟で港は満席状態、その賑わいは凄かっただろう。
もしも焼き討ちにあわずにそのまま貿易港として続いていれば、今は静かなこの港はいったいどうなっていたのだろうか・・・
最後に
このような宣教師達の残した布教の魂は、現在も佐世保を含めた長崎各地に残る教会の数の多さとその質の高さからうかがいしることができる。
近年この教会郡を世界遺産にしようという運動がおこっている。世界に見直され今一度宣教師やそれを取りまく当時の人々の軌跡が、多くの人々に知られることを願いたい。